

# 新報



第六號

## 目次

表紙	繪	杉浦朝武	短歌	談片(評論)	袖影
欄別れて我等(長詩)	畫	同上	丹	碧(短歌)	奥原碧雲
繪はがき(美文)		川上櫻翠	やなぎ	街(短歌)	米子支部
紅繪賣の歌(長詩)		中村荷影	松葉牡丹(消息)	裡(短歌)	内田百合等
袖摸様(短歌)		有松曉衣	夏蒲	染(短歌)	松江支部
青年佛士に與(評論)		山本明星	編輯餘言	吟(俳句)	碧葉
透き影(短歌)		入澤涼月	新刊寄贈		
小説家日記(雜文)		濱田支部	君古	(短歌)	河野翠漱
君を思へば(短歌)		前田木風	夕	畫(短歌)	大屋桂水
朝風(俳句)		大東支部		陽(綱畫)	杉浦朝武
卯の花(俳句)		偶々會			
白沫(短歌)		福田紫雲			

銀鈴創刊第貳年

謹て江湖に捧ぐ。  
 我等が「銀鈴」爰に漸やく滿一年を經、冊を重ねる六、着々として我等が事業は眞摯の態度を表明し來りぬ。惟ふに、文藝の事、多く社會に容れられず、殊にこの種専門の雜誌に至りては、果してよく同情を寄せ、趣味を傾注せらるるの士尠からざるべし乎。  
 我等固と、微力にして、唯、各々所長の高稿を賜へる先輩と、一般同情ふかき愛讀者と、趣味を等しうする我が會友諸君との、深甚なる恩賚に倚りて、寔に今日を迎へ得たるのみ。感極まりて泣かずんばならず。  
 然れ共、經營の困難なるは、必然伴ふべき萬般事業の常徑なり。われ等は既に第一の風濤を凌ぎ、將に、より大なる苦闘に向つて奮進せんとす。諸君能く之を容るるや否。

詩は我等の生命也、事に詩歌に従ふ、また何等の多幸ぞや。今日諸君の健康を祝し、謹んで叙す。

明治三十八年七月一日

銀鈴社同人



銀鈴第六號

明治三十八年七月一日特別刊行

わかれてわれら

川上櫻翠

わかれてわれら  
 逢へばこそ語らめうましむつとど

いつと見なばまなざし戀のよるこび  
 いと戀は木の間まなざし  
 ふたりの手ふれなば消ぬる星かも、  
 相々のは手ふれなば消ぬる星かも、  
 深胸のいだけばし海や荒磯。  
 靈をいだけなつたや座のぎ、

われらの斯く。鳴呼げに知るや望よ  
 ひとれ時の預言、戀の光さす時去る  
 ほそみづにふたした「時」あなやと葉は  
 しづしみづと來しあなやと葉は  
 ろは咲きと來しあなやと葉は  
 賤花のやうに萎も枯つる、あは

(ロセツテイ)

# 繪はがき

## 荷影 散史

あや子さま

みどり

(1) この間ひと日を、山里なるをばがり訪ひて暮らし申候。かへりには、なつかしき君に送るべくと、なにげなく手折らんとすればあな……風なき草むらに、さやくと音して、紅の舌濡う吐きたる蛇のまつはらんどは……思ひきりて、拙くは候へど、寫生にても汚れなきがど、筆とり申候。これでも花と御覽下さるやいなや。

みどり 兄

あや子

(2) かたよりをまつ、葉書たしかに落手致候。み心こめられし筆のあと、ゆかしき香の身にしむ心地致候。山里なるをば許とひ給ひしとや、こゝ波靜かなる濱邊はれいやか、淨

みどりさま

あや子

(3) ちぬの浦曲にとばかり、それも人づてにて何處をわてとしら波の、心のみ碎き候折柄、れ手紙のいと、長きながきに、まづうれひの雲はまきさられ候、ひとたびは、なんとなうかなしく、かこちても見候ぞかし。かへりには、必らず立ち寄せ給へ、妹にの心づくしの、れつとばかりを待つものかは……。

(4) うらまれついでに、小生はこゝしばらくを足どめいたすべく定め候。つとにはなにをのぞみ給ふや、リボンか、繪ハガキか、それとも外に……。

申送らせたまへ。ねん地のがた〜、汽車

いや山陰にはじめて通じたる、貨車にうづ高  
くつみこませて、かへるべく候

みどり

愛する  
あやさん

(5)

都合により、外海をまはりて、昨夜かへり  
申候。陸ならば是非にとぞんじ候ひしも、ゆ  
るさせたまへ、その代りねみやげは、貨車と  
ころでなく、大なる郵船にとつみこみ候ま  
い、せひく従者をめしつれて、とりにいら  
せられ度、ひとへにね特ちまぬらせ候

みどり

あや子さまへ

(6)

何たるにしぞ、かくもいすかのはしの、  
くひちがひ候ものかな。松青く砂白きれん地  
、ひとたびはかならずと定め候こと故、この  
折をさいはひ、あすはいよく出立と、空合  
をきづかひながら、西のそらをあふげば、あ

あはじめの参上ゆる、なにもよかれかしと  
いのるの外に、念なきわれ、御へいかつぎと  
笑はるればそれまで候ぞかし  
この夕みに心れくれぬ  
んどのみに心れくれぬ

あやの妹より

あにうへ様

(完)

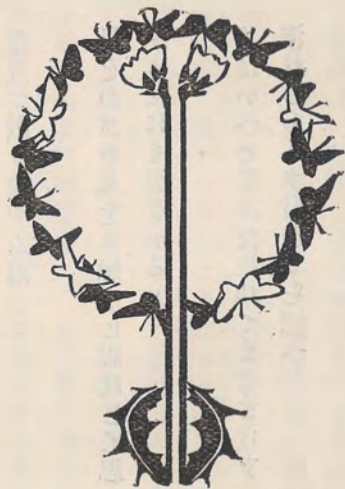
▲花娘

木

風

若葉みどりの、せと川に、  
入日の照りて、葉がそよぐ、  
かはは丸ホチヤすましき目、  
笑ふて見せた、そのゑくぼ。

(てふくがとまる島田まげ、  
とまるはつたよ花ぢやもの)、  
口よりもるよき色香、  
見ればとなりの花むすめ。  
甲斐なきこひとあきらめて、  
夕もやこむるうら川に、  
まだらの小牛ひき入れた、  
今日をなでりと一ど流し。



紅繪賣の歌

有松 曉衣

美しい哉、京の兒ら  
小袖なが袖ゆら／＼と  
み歩にふさふさ草履や  
塵もたゝねば都路の  
春の遊びは興あらむ。

花の落ちはな追ひ拾ひ  
器に盛りつらね籬ごとの

殿やひめ君さて和兒よ  
姥もまじりて仕へむに  
國の詛りをどがめざれ。

いなどよ、老いて醜くけれ  
姥も昔はうつくしき  
江戸の舞姫二のつゞみ  
うてば花散る謠の座  
紅繪の舞へば身も舞はむ。

伏見の土師につくらせて  
焼うつくしき清水や  
西の機場の衣させて  
棚にと祭る籬のやう  
あでに美しきはこの紅繪。

ひとつ召させて振袖に  
秘めても見ませ羅の  
八ッ口透いて紅うつる  
あらど取出て咬みまさは

唇に紅さすよき娘。

宮の若子に望まれて

明日は塗駕籠、綿帽子

焼のかつぐは紅繪笠

ひとつ召されよ、錢二文

紅繪の舞へば身も舞はひ。

### 袖摸様

山本 明星

ゆく春のなやみ寂しきゆふ雨や桐の

花且つ散りぬゆふ雨

世をわびず人をも戀はじ思はじと思ふにだにも涙ながるゝ

さはいへどなみだ流れてとどまらず流れしあへず君をこそ戀へ

絹團扇緋房ゆらにながやかに、光琳振の繪はほめまさん

舞姫が衣桁にかけし萌黄衣のたのたゆたの袖摸様かな

### 青年俳士に與ふ

入澤 涼月

吾人薄學不文、敢てはからず一書を所謂青年俳士諸卿の几下に呈せんとす。

彼の正岡子規は俳傑なり。身猶壯、帝都に呼號して、天保以來俳調亂れ下等社界の玩弄物に供せられ、俗醜紛々救ふべからざる悲境に陥りしを、歸濤に挽回し、遂に天明の中興蕪村と名譽を競ひ、地方に進播しては卿等青年の手によりて活動せられ、清淡の氣、飄逸の趣、芭蕉の未だ夢想せざる、蕪村よりも變化多き特色を有するに至り、南海北疆到る處、

かなり時代の要求に満足せしむべきものを作り、元録天明を凌駕して、古今未曾有の盛時となりぬ。然れ共、これは一都市に於て見るべき現象にして總ての方面に流布するにあらずんば、仮令今より一進歩を來すを得るも、未だ以て満足すべきに非ざる也。古來の惡習に戀々たる月並宗匠を撲滅し、また其の子分をも退治せざるべからず、斯して舉國すべき明治の俳句を作り得れば、初めて満足すべき也。惜しい哉子規中道にして斃れたるも、猶多望なる繼續者地方にあるあり、子規が遺風を繼ぎ俳句に方を致さんとするの士、勢はひ、熱心なる諸卿を煩はざるべからず、諸卿亦既に業にその覺悟あるものと信す。苟くも諸卿の如きは、俳諧の歴史を研めざるべからず、時代の變遷につきて起れる俳句の外形詩趣をも味はざる可らず、こは素より吾人の喋々を俟たざる所と信す、然るに俳書を讀まず、句集を讀まず、歴史を究めず、何の經驗なきもの、所謂小器用にまかせ、功に十

七字を羅列して得々たる小俳士のまゝ之あるを聞く、悲まざるを得んや。或人はいへり、俳句の研究をなさんには、古人の作らざる題目を捉へて作れど、吾人は諸卿と共にこの分らず屋を大笑せんと欲す、俳句は新題目を拒まずといへ共、之を歓迎するものにあらず、古人の作りし題目をどらへて之を咀嚼し其發見せざる新趣を見出すこと、一の研究ともなれ、徒らに新題目をどらへて作句するは、さまで研究にはならざるが如し、反つて奇を衒ひ、ムエ的句となるを免れず、矧んや俗陋と風雅なる區別あるに於てかや。新は多く俗陋となる、俗陋なるものは文學以外たれば也。想ふに諸兄は俳句を作る人也、座興のため、面白半分にて之を作るにあらずして確なる目的の下に作句せるは吾人之を知了す。故に俳句の前途を思はゞ一致せざるべからず、和合せざるべからず、相呼應してなすにあらずんば、到底成功するものにあらず、而も、或地方

唇に紅さすよき娘。

宮の若子に望まれて

明日は塗駕籠、綿帽子

焼のかつぐは紅繪笠

ひとつ召されよ、錢二文

紅繪の舞へば身も舞はひ。

### 袖摸様

山本 明星

ゆく春のなやみ寂しきゆふ雨や桐の

花且つ散りぬゆふ雨

世をわびず人をも戀はじ思はじと思ふにだにも涙ながるゝ

さはいへどなみだ流れてとどまらず流れしあへず君をこそ戀へ

絹團扇緋房ゆららにながやかに、光琳振の繪はほめまさん

舞姫が衣桁にかけし萌黄衣のたのたゆたの袖摸様かな

### 青年俳士に與ふ

入澤 涼月

吾人薄學不文、敢てはからず一書を所謂青年俳士諸卿の几下に呈せんとす。

彼の正岡子規は俳傑なり。身猶壯、帝都に呼號して、天保以來俳調亂れ下等社界の玩弄物に供せられ、俗醜紛々救ふべからざる悲境に陥りしを、歸濤に挽回し、遂に天明の中興蕪村と名譽を競ひ、地方に進播しては卿等青年の手によりて活動せられ、清淡の氣、飄逸の趣、芭蕉の未だ夢想せざる、蕪村よりも變化多き特色を有するに至り、南海北疆到る處、

かなり時代の要求に満足せしむべきものを作り、元録天明を凌駕して、古今未曾有の盛時となりぬ。然れ共、これは一都市に於て見るべき現象にして總ての方面に流布するにあらずんば、仮令今より一進歩を來すを得るも、未だ以て満足すべきに非ざる也。古來の惡習に戀々たる月並宗匠を撲滅し、また其の子分をも退治せざるべからず、斯して舉國すべき明治の俳句を作り得れば、初めて満足すべき也。惜しい哉子規中道にして斃れたるも、猶多望なる繼續者地方にあるあり、子規が遺風を繼ぎ俳句に方を致さんとするの士、勢はひ、熱心なる諸卿を煩はざるべからず、諸卿亦既に業にその覺悟あるものと信す。苟くも諸卿の如きは、俳諧の歴史を研めざるべからず、時代の變遷につきて起れる俳句の外形詩趣をも味はざる可らず、こは素より吾人の喋々を俟たざる所と信す、然るに俳書を讀まず、句集を讀まず、歴史を究めず、何の經驗なきもの、所謂小器用にまかせ、功に十

七字を羅列して得々たる小俳士のまゝ之あるを聞く、悲まざるを得んや。或人はいへり、俳句の研究をなさんには、古人の作らざる題目を捉へて作れど、吾人は諸卿と共にこの分らず屋を大笑せんと欲す、俳句は新題目を拒まずといへ共、之を歓迎するものにあらず、古人の作りし題目をどらへて之を咀嚼し其發見せざる新趣を見出すこと、一の研究ともなれ、徒らに新題目をどらへて作句するは、さまで研究にはならざるが如し、反つて奇を衒ひ、ムエ的句となるを免れず、矧んや俗陋と風雅なる區別あるに於てかや。新は多く俗陋となる、俗陋なるものは文學以外たれば也。想ふに諸兄は俳句を作る人也、座興のため、面白半分にて之を作るにあらずして確なる目的の下に作句せるは吾人之を知了す。故に俳句の前途を思はゞ一致せざるべからず、和合せざるべからず、相呼應してなすにあらずんば、到底成功するものにあらず、而も、或地方

にありては結社反目、同黨相搏嗜せりと、か  
いる輩は羨望的卑劣漢に過ぎずして、た家騒  
動に於ける讒臣也。伊達家の原田甲斐也。吾  
人は諸卿と共にこの鼠輩を一掃せざんば止ま  
ざるべし。

聞くならく、活字に列べられ、白紙に印刷せ  
らるるを唯一の目的として作れる青年輩あり  
と、止ぬる哉、俳句の前途、新俳句の生命を  
保つべき青年にしてこの事あり、止ぬる哉、  
寧ろ『文藝倶楽部』の課題、『萬朝報』の懸  
賞に應ずるの可なるに如かず、活字に組まる  
ゝを希ふは、雅號の廣告に過ぎず、眞に俳句  
の前途を思慮する人にあらざして、俳句を煮  
出しに自己の立脚地を得んと欲するもの也、  
而も事若しならずんば、朝の友は夕の敵とな  
り、種々の方法によりて、陥れ、罵り、嘲り、  
以て防衛に之努む、まことに悲まざるべけむ  
や。俳句にありては叙情を作ること、短歌よ  
りも少し。雖も、社會の秘密を語り、薄命の  
人に向つて一掬の涙を注ぐに止まらず、遠大

の觀念と、眞正にして潔白なる理想を歌ひ、  
國民の性情を感奮せしめ、人生の快樂と、幸  
福はこの遠大なる觀念潔白なる理想の裡にあ  
るを認めしむるは、短歌よりも俳句に於てな  
し易し、何となれば、俳句はかなり社會の全  
般に普及せる文學なれば也。吾人今更これを  
いはせど雖も、諸卿にありては已にこの覺悟  
あることを信じて疑はざる也。

以上述べるところ、陳ならざれば駄、素よ  
り高覽にかなはざらんも、吾人が斯道に對す  
る老婆心より吐露せるに外ならず、諸卿にし  
て幸に之を解するを得ば幸甚なり。

透き影 (新涼會 濱田支部)

松本 泣花

行くや春戀にもへぬる白鳩の胸ささ  
て見む思ひとし云へ  
後藤 孤星

奇しき香のわがあたゝかき胸にみつ

稚かざして舞はむといへや

河野 素陽

うら若さをとめと生れ戀知りつ奇し  
きなやみも身にねばねける

伏谷 紫雨

そとよりて人の小琴の音にしのお門  
べかをるや木蓮の花

須田 紫萍

云ひしうぬくしき力のあるがごとわ  
が魂ゆらぐ白百合の花

増野 翅白

春の血にゆらぐおもひの面影か櫻は  
きみがやさ笑に似る

魂さそふ青葉がふくの夢の宮白裳の  
神が影も透き見ゆ

まどろめば蝶とすぎぬるうまし夢藤  
のとびらに怨ながきかも

小説家日記

さかほ

▲某日。月曜日。曇。

「あの、郵便がまわりました」

やツといふ体、床からはね上げられたやうに  
起き直る。引ツたくつて帯封までが、ね、面  
倒ど、ばらり擴げた『萬朝報』

歪取眼でさがしたつて、コイツ妙だな。今  
度こそ中原の鹿、射止め得たりと思つたのは  
ガラリ目算が外れて、又しても一等本山荻舟  
、へツ、荻舟奴、朝報社と秘密の關係でも結  
んでやがるんだな。懸賞應募はもう廢めツ了  
うぞ、第一新聞社が腐つてやがるんだもの。

へツ。可笑しくもねや。

妻君いやさ令夫人が馳け付けて

「まあ良人、何うしてそんなにブツ／＼云  
ツて居らッしやるの」

「小癩なツ。」と飛び上る、妻君目を丸くし

てドギマギする、と思ふ間に鐵瓶がころりチヤブン。

あわ小説家は今日限り廢業だ。妻君まつた奥方難有うございますッて。へッ、人間だいな、人だいな、動物だいな、腐ッ、笑はせ遊ばしやあがる、はッはい、はい。

定刻晝寢

熟考の上、夕方から再び小説に筆を執る、令夫人傍より丁寧茶を入れる、矢ッ張り美しいなど、斯う云ふと妻君頗る上氣嫌だが、其實、内の嬾事、ひさがへるの御面相よろしくと來てやがるんだ、はッはい、い小説家が聞いて呆れる咄さ。就眠午前第三時、雞の聲。

君を思へば

前田 木風

れぼろ灯にうつる木蔭の若きひと遠目に見つやればしまの君

若駒や君が姿の遠のきて香具山おろす初夏の風

ひたはせて淺間の洞の火の口に入りてし死なむ君を思へば

ねん夢か寝ざめの姿やさ面程よき頃に詩の譜たまへ

舞姫が江戸むらさきの裾模様櫻月夜のともしびはゆる

朝 風

(新涼會 大東支部)

若葉して暗くなりける小窓哉 洋洲

山莊に宿かる宵やはとゞぎす 百笑

稚兒鬚のリボン床しき胡蝶哉 春郊

雁なくや古郷を偲ぶ露營の夜 翠蔭

矢飛白の兒愛らしや衣更 白虎

み名呼べば怖きやうにも胸せまりただに眼を据へ君を見護りぬ

戀せしめ君こそやさしわがまみに彫られて去なぬあねなみ姿

寂しけれど涙あふれぬ夕なりやがては君と手とり寝ぬべき

眞珠手にわがうたよしとめでましぬ悔は遠鳴り白沫立つ日

海人と生ひて磯にまろびて戀知らぬ醜男なれば君は知らずも

初夏風君がうなげに柳ふき遠さかなれも水ゆるや朝

新らしき笠四つ五つ田植かな 明星  
鯉はねて柳のゆれる入江哉  
鳩なきて朝風清き若葉かな 梨雨  
瀬を下る舟涼しさよ午の嵐  
若葉青葉裏葉の見ゆる嵐哉 一陣の風に牡丹のゆらぎ哉

卯の花

(米々會子)

水打つてそよ吹く風や竹の家 雪兔  
田螺なくや旅籠の月を欄により 素外  
幣たるる卯の花垣根 水流る 不男  
短か夜や水の濁りし 筑後川 萩雫  
軒近く 糺の藤の若葉かな 木風  
あつまやの青葉若葉に隠れ鳧

白沫

福田 紫雲



# 作歌談片

(其二)

## 袖 影

客問ふて曰く、

▲和歌は、因襲の久しき一定の形式に、據らざるべからざるもの乎。

△否、適當の形式あらば、固より之を改むるも亦善し、何ぞ舊きに就かざるを得ざるの理あらんらや。

▲適當の形式について、研究の結果ありや。

△未だ深く究めず。七五調の三十一字は略々不動の形式と思料せり、是、一は慣習によりて、養はれたるものなるべけれど、七五調三十一字以外に於て試みたる形式の、尙ほ、生硬とやいふべき感あるは、實に怪むべき限りにこそ。

▲散文的形式はいかに。

△一列を示されれば、如何とも断定し難けれども、詩歌に緊迫せる形式を必要とするは

元來情的想像の活動、其極度に達し、れのづ

からリズムを成せしものにして、想像の翼が奔放自在に翱翔し、全く意識を離れたる境に到りて、初めて詩は文字に現はさるるものなれば、制せんとするも自然のリズムが、必然の要件を備へて、詩人の筆端に上るものなるが故に、散文的形式を用ゐなば、夫の談話の妙所に入りて調諧を作り人を感せしむるが如き効果を見ざるに終るべし。

▲間々字餘りを生ぜるは奈何。

△字餘りは必然にして生じたるものならざるべからず、之がため勢力を得て一段の興趣を覺ゆるの場合ならざるべからず。漫然字餘りを試むるは固より不可なり。

▲諸。舊派の流麗は就て學ぶに値せずや。

△流麗にあらずして、牛の小便也、斯の如くんば、形式の美は没却せられ、却りて内容を害ふに至る、三思して可なるべし。

# 丹 碧

## 碧 雲

青葉わか葉南大門のまたるすぎ仁王の像に小手あはさるる

公麻呂が輔のなごりいまに見る慈眼  
たふとき金鋼廬遮那佛(國中連公麻呂は)  
大佛の鑄工長也)

金色の後光まばゆきろしやな佛仰ぐ  
にしのぶ奈良の大御代

讚するに言葉もしらす良辨が鑿の香  
に酔ふ雨の三月堂

金泥の御經たふたき厨子のうち鑿の  
香とはに古れもほゆ

## やなぎ街

(新涼會  
米子支部)

田中 雪兎

筆取りて詩成らぬ春のもよより金  
星空にいく夜かぞへし  
舟を遣る湖畔の月や夏の宵櫓に和し  
友の笛吹きにける

松下 素蝶

頼照らす灯しづかにそむきまゐらせ  
て柳の街をゆきすぎにけり  
花いかだみ門を西へ流しては君にま  
ゐると唄のこし行く

前田 木風

くれないに鳥の血吐きぬ岩躑躅似け  
るほこりと戀たいへつもの  
我いつも絶えずし君がみ名となへ夢  
見心地の路辿りぬる

# 松葉牡丹

■昨春來殊にこの頃は健康體を作るといふにのみ傾いて、詩興とんと起り申さず、當分讀者の方に廻り度存じ居候。毎日の課業はテニス、追ては之も倦む期來るべしと存候。幸に兄が努力によりて地方の斯壇に、秩序ある進歩を見得るは余が私かに感謝致す處に有之候。(青戸白虹)

■野口寧齋先生の卒去ば將に勃興せんとする漢詩界の恨事に有之候。兩三日前森鷗外漁史より戰地通信あり、左に轉記貴覽に入れ候。高作とは旅順陥落の拙吟イヤハヤ慚愧の至りに候。(山路露村)

四月十七日の御書狀拜見いたし候、高作平素の御涵養も相見ぬゆかしく存候。小生も少し出て見たるもの有之候へ共いづれ後になりて出さんとれもひ居候。但旅順箱入娘のやうなるひどいものはそれ以外ゆる御安心被下度候。呵々(後略)

■先般は御芳翰を忝ふし難有存候。至急何かと思ひ申候へ共、元來なる横着者且は貴誌につきて貴意にそはず、いかにもしてと今日まで考へ候へ共遂に一首も成り不申不本意ながらこの度は失禮仕候。この後何か成り申し候は、餘白を惠まれ度候。(多田東岳)

■御手紙拜誦、大兄及び「銀鈴」の健在を祝し候。折角の御思召なれど小生昨今多忙なるため漸らしき作これなく貴意に反する多大に候へ共、別紙の如きものにて御間に合は、幸甚に候(川上櫻翠)

■御言葉に甘へ駄文送附御取捨御隨意に候。「白虹」五號御笑覽の事と存候ふが、如何に活動せるや御評も承はり度候、次號は改卷號としてあらゆる武者振を試むる決心、實行を見られ度候。(入澤涼月)

■當時、綠蔭風涼しき節と相成、時々閑を偷んで鮮やかなるサツアクリンの風光に浴し居申し候。たい彩筆を弄するといふ計りにて、あまり面白きものも出來申さず、汗顔の至りに存じ

候。(杉浦朝武)

■花の都は青葉の都となり候。先頃は美しき「銀鈴」御送付にあづかり難有拜見仕候。貴兄の御熱誠眞に敬服の外御座なく候。早速御返書差上ぐべきの處、彼是に紛れ失禮のみ重ね候段幾重にも御詫び仕候。興來の時もやあつば御餘白拜借せんと力み居候。(木村寒水)

■本日出發福岡へ向ひ候。何れ到着後詳細の様子御報申上ぐべく候。(菅二浪)

■青葉がくれに山ほどとぎすも待たるる頃と相成候、こ閑静なお住居には何ほうか趣味ふかくなりまさり候御事と推し上げ候ふ。歩一步進み候「銀鈴」多大の歡喜を以て繰返しをり候。いづもながら御熱誠のねん筆に、幾多の人が救はるべき幸福喜ばしう存候。短歌御精選の結果か何れもよく調ひお骨折のほど推申上候。(man~ya)

■青葉がくれの杜啼にせめてもの俗腸を醫し居り候。調高き大兄の御近仕いかに。次回發行の「銀鈴」待遠く候。(立田紅翠)

■小生この頃事の外多忙にて、久しく短歌に筆を染め不申しのめ會も香雨氏の手をかりて、責ふさぎ居候次第。「銀鈴」いよ／＼發達の由賀上候。青葉若葉山時鳥何となくうたなつかしき頃にも候かな。(奥原碧雲)

■原稿二十九日夜執筆三十日發送の積りなりし處、大海戰の電報頻來當夜は宿直徹夜せし位、其後引續き多忙寸暇を得ざるに付き、乍遺憾今回は寄稿出來ぬ。右不惡御諒恕被下度不取敢た斷りに及びます。(錦織錦孺子)

■天氣晴明ならば明日曜、友と金剛山に登つて、大に詩囊を肥やす筈すが、この雨模様では遂に駄目たること疑ふまでもあるまじ、残念です。關西文壇に重視せられて居た朝日の浩々歌客は同社を辞せられた由です、其實例の霞亭が策略と申すものもあります。併し角田氏にとつては却て此方が好都合かも知れませぬ。聞くが如んば、氏は更に三井物産?の機關誌主幹として

同社へ入られる由、事實如何にや暫く疑を存して傳へ申升(紫雲)

# 簾裡

△ 内田百合(松江)

さらばとてうちうなづきつ雨の橋聞き分  
けよくも君は分れぬ

海棠やさても風情の似たる哉つねにも雨  
はふりそいげかし

△ 米村水聲(松江)

ねもはれて待てとし云はひ百宵も千夜も  
待つべし花をしとねと

あるは風あるは雨をまよびねこそ石とな  
らばやややし夏野の

夕もやはつゝみぬ遠き小野の火と花のや  
うなるわれら二人を

こもり居やひと日圓らの瘡なでゝ行く春  
惜むホ句はなりにし

△ 井上清軒(邑智)

春は來ぬ梅の花笠花やかにうぐひす姫も  
また浮かれ來し

△ 長田蓁瞳(那賀)

火をふきて七たびこの世はろばさむ痛手  
負ひては何物も見ず

白磯や小ひさ素足の趾に笑み臙月夜をそ  
と馳せにける

さあらずや「みどりこぼるゝ葉」と「あ  
かさ京の夏花」ふさと見るに

小鼓や舞姫十たり玉殿の柱ゆらぎて月お  
ぼろなり

よろこびのをどり子四尺(影障子)袖の  
香めでてさざめく街や

△ 田中雪兔(米子)

君故に神も否みぬ年若さみ姉もすてぬ王  
をたに去る

水に寝て思はず明けし短か夜や君が耳に  
も啼きぬはとゝぎす

更科や京へ人遣る夕月夜舟はしづかに淀  
の川ゆけ

△ 立石洲洋(八束)

竹植ゑて月待つ宵の小枕に夏の水よき音  
を傳へけり

別つべき袂惜しとやはとゝぎす汝も啼き  
にけり橋のあかつき

△ 山下石泉(邑智)

盲ひてはこれよき道とあへぎしを荆棘さ  
す世かいま覺ゆる

玉船や波路ゆらゝゆれ往きて今をかぎ  
りの海の樂聞く

△ 山本明星(大原)

酌めどなほ千度かゆれどつきぬ泉これや  
女神の戀の乳房か

窓あけて晨若葉の風を見る庭の小鳩よ人  
になじまぬ

△ 鈴木曉星(那賀)

これをしも罪としいふや罪なりと云は  
云はせつ君が手をとる

君が詩は花の香に似て色に似てわが胸く  
しくどこふれぬるや(翠嶽の君に)

罪なりとよし驕れりとそれもよし涙きよ  
きは君すでに知る

戀しさのやる方なくて高らかに父よと呼

べば山彦かへしぬ(父の墓前にて)

△ 内部梨雨(大原)

あさ風に小萩こぼれし奥庭やみ手とり池  
の水掬ばまし

△ 有松曉表(津山)

身若うて髪のがきもめなれぬ子京のそ  
だちぞ京の歌れくる(翠嶽の君に)

△ 前田木風(米子)

春の夜の櫻あかりは君によしそひよる手  
もてよき君巻かむ

△ 立田紅翠(松江)

若き妓に手添へ舞強ひ春の宵おばしま近  
く酒置きにける

野狐の小き智慧もて恐怖もて葡萄うかい  
ふ眸にも似ざるや

秋は草のかれ行く運命もつものとしづか  
に笑みて君は去にしか

海こゑて來しか秋風山こゑて來しか秋風  
我を泣かしむ

菖蒲染

(新涼會 松江支部)

立石 洲洋

宵祭り太鼓柏子の面白く幼な權左が  
詣で姿よ

心なく遠くたもとをわけしより若さ  
思ひの遣りどころなき

坂本 笑風

うた誦せば合歡の葉ゆらぐ夕靄にみ  
聲ついで君來ましけり

湯あがりのあやめそめなす華美すが  
た藤色ばかり裳のそよぎける

金本 征帆

封じたる百合の蕾の秘め歌は牧人讃  
ず歌なりけらし

懐惱やみ階による子ぬかづく子美し  
き子に趣味をあたへよ

蓮花や朝しばらくを堂の椽尼のしめ  
言われて泣かしめぬ

夏季吟

高樓にキオリン弾くや夏の月 碧葉

廢園の杜鵑花に蜂の集ひ覺

廻國の箱根八里や閑古鳥 清軒

葉櫻や將軍の馬白くして

蓮池に流れてせまる花藻かな 木風

洗場に白き花藻や宵の雨

藻の花や人ものだかぬ古き池

茅庵に若葉の風のそよぎ哉 洲洋

若竹の繁るが中や批把熟す

横断す太平洋や夏の雲

陳列や五經存して風薫る

▲編輯餘言▼

●預告の如く本號は体裁を改め候爰に杉浦畫  
伯と玉稿を賜へる先輩とに高謝の意を表し候  
●本號に限り金七錢郵税を加へ九錢を申受候  
●次號は九月一日發行、べ切八月三日と致候  
●其後本社維持費を左の通り恵まれ候、掲げ  
て深厚なる謝意を表し候

金參拾錢 某 女君

金參拾錢 某 女君

金六拾錢 山本恒二君

●第一回和歌俳句の互撰集結果は紙面の都合  
により次號に譲り候、第二回課題は追て發表  
いたすべく候  
●新聞雜誌記者及び一般諸君の本號に對する  
高評を希望致候

▲寄贈新刊▼

- △艸 笛 (三ノ四) 松江 報光 社
- △國 詩 (第 三) 東京 國 詩 社
- △白 虹 (一ノ五) 岡山 血 汐 會
- △少年文壇 (四ノ三) 大坂 少年文會
- △信州青年 (終刊號) 信濃 信州青年社



河野 岩雄

ふたつなきいのちなれども君へころ  
どのみに眼のかゝやきにける

れどなへばひろかに門の木蓮や要く  
いりて君が室へこそ

こゝろみにみ鏡ひきても見たかりし  
いく日心のむすばうれしや

遠つ世の躬恒も來ると山住や靜かに

歌の草案しぬる

里慣れて愛想またよく大人びぬ十五  
とつきし君とれもふに

こゝろよりこゝろに何のかよへばか  
素直に笑みて頬のろまりつる

紺青に空すみ湖もひとつ色れなしひ  
かりの満つると思へば

朝風を細蚊帳やはらに吹き入れつ人  
とそひ寝の蓮かをらしむ

わかつさや水よき里の車井にふたり  
し立ちぬ啼くほとゝぎす

からく〜と男聲して夏木立君によく  
似し笑ひやうかな

古 畫

大屋 左一

琴の手のなめら律呂や新婦の華奢の  
うすもの睦魂ゆらぐ

さなり君世の所謂罪の「美き夢」を  
どはにさめなど抱きて去なむ

古畫に見るまばら頬鬚の長かるにヨ  
ハテしぬびて衿正しける

襲はれぬ目覺めてもまだ消ぬやらぬ  
怖れたのゝぎ灯の暗き殿

袖破れぬ怨は深し春の殿かの日のぞ  
みて忍ぶれどなほ(女がうたへる)

地方文壇の巨擘

虹 白

第貳卷第壹號要目

月 刊  
文學雜誌

編輯主任 入澤涼月  
第貳卷第壹號

(六月一日發行)

●岡山をして藝術國たらしめよ  
●川柳は風俗詩である  
●坂井久良岐  
●花房 柳外

- 水ごころ……………筒井 堇波
- 白鶴の歌……………内海 信之
- 又思へらく……………平井 紅雨
- 詩の子を嘲る……………鬼 若 丸
- 黒髪……………三木 露 風
- 初夏の旅……………山野 邊 浮 草
- 隣の寺……………神尾 江 村
- 菖蒲戸……………栗岩 花 山 等
- 甘言苦語……………誌友 同 人
- 戀のふみから……………上岡 吉 備 男
- 野調……………畑 竹 堂
- 曉雲……………高 畑 秀 子
- 播磨より……………有 本 芳 水
- 文藝時評……………高 濱 天 我
- 文藝時評……………入 澤 涼 月

發行所

岡山市花畑 血 汐 會

文學 雜誌 わか草

一冊郵税 共金五錢

片々たる小雜誌なり、然れ共、一  
度之を繙かんか、趣味の深さを忘  
れ得ざる可し

出雲國大原郡  
大東町山本方

新涼會大東支部

明治三十八年六月廿六日印刷  
同 年七月一日發行

(本號ニ 定價七錢)

編輯 兼 河 野 岩 雄  
發行 兼 島根縣邑智郡田所村大字下田所  
七百三十二番地

印刷 兼 島根縣飯石郡赤名村大字赤名  
八百三番地

印刷 兼 木 村 柳 三 郎

印刷 兼 全縣全郡全村大字全二百八十一番地

印刷 兼 赤 名 活 版 所

印刷 兼 石見國濱田町榮町

取次所 共 榮 堂

取次所 出雲國大原郡大東町

取次所 葵 蓉 堂



編輯擔任

大河野翠  
大屋桂水  
佐々木朝風



高根縣石見國邑智郡田所村  
發行所 銀鈴社